

口は健康のもと Vol.177

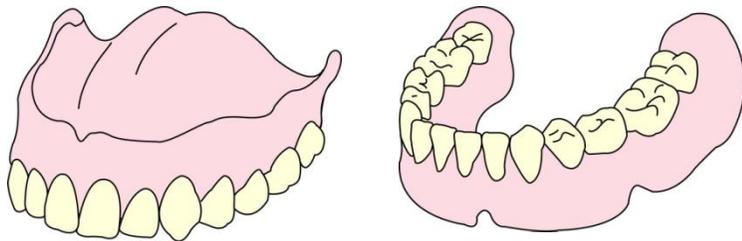
続 入れ歯の温故知新 ～進化する義歯づくり～

前回、世界で最古の入れ歯は、1500年代に我が国で使われた木製の総入れ歯（木床義歯）で当時の仏師が製作したことを説明しました。その後、木床義歯は様々な改良が加えられました。当初は義歯の木材に歯の大きさの刻みを入れて前歯の形を表わしていましたが、黒檀や蠟石、象牙などの材料を用いたものや寄木造り構造として精密に組み込むものも製作されました。

江戸時代には「入れ歯師」という表記がみられ、入れ歯製作の専門職として製作にあたっていました。一方、抜歯などの治療は「口中医」と呼ばれる医師が担当し、それぞれの分野を分担していたようです。今の歯科医師はこれらをまとめて担当しますので、システムが異なります。口中医と入れ歯師を現在に例えると、眼科医と眼鏡店の関係に近いかもしれません。

また滝澤馬琴、杉田玄白、平賀源内などが入れ歯を使用していたことが知られており、柳生飛騨守宗冬の墓からは、非常に精巧に製作された木床義歯が発見されています。

時代が進んで幕末から明治になると、アメリカで開発されたゴム床義歯が導入され、製作されるようになります。この続きは次号で。



奥羽大学歯学部附属病院
総合歯科 教授 山森 徹雄

